

「次世代を育てる家庭の力」

中野教会 河村 冨

「次世代を育てる家庭の力」というテーマにおいて、キリスト教が果たす役割について考えてみたい。

家庭は、子どもたちにとって最初の学びの場であり、その影響は絶大である。

聖書においても、家庭が子どもたちに与える影響が重視されている。「あなたがたの子どもたちを教育するときに、常に主の教えを思い出しなさい」(エペソ 6:4) とあるように、聖書は、家庭が子どもたちにとって重要な役割を果たすことが強調されている。

また、家庭での子育てが、社会に与える影響も無視されてはならない。

キリスト教は、愛や優しさ、正義、そして他者への奉仕を重んじる教えである。家庭での子育てが、子どもたちにこれらの正しい倫理観を教え、社会に貢献する人材を育成することができる。

これゆえ、家庭から社会へのシームレスな移行が幼児期に大切であるといえよう。子どもにとって、家庭から踏み出す最初の「社会」とは、幼稚園、保育園、公園や児童館、そしてなによりも教会（教会の親子室を含む）である。

ほとんどの子どもたちは、人生で最初にこのような場で「社会」と接する。そしてそこで、人生の土台を形成するのである。人生の土台とは学問ではない、学問は建物であり、土台をしっかりと据えた上で、学齢期になったら学問という建物を築いていくのが適切である。

具体的には、いわゆる「早期教育、先取り教育」が優先順位の上位に来るのではない。言葉を変えて言うならば、IQ、偏差値、点数など成績で測れる能力、これを認知能力と言うが、それは土台をしっかりと据えた後からでも充分間に合うこと。

むしろ家庭から社会へと踏み出す時期にこそ学んでおくべきことは、成績で測れない能力。即ち優しさ、協調性、自制心といった数値化できない、非認知能力をこそ伸ばすべきと考える。

なぜなら、これからの予測不可能な時代にあって、何があっても柔軟に受け止める感性を磨くことが必要であり、人生百年時代が到来し、現在の子どもの半数以上は 107 歳

以上まで生きると言われている。しかし幼児期は3～5歳までであることは変わらないからである。

勿論、人間、手遅れという事はないが、一番適切なのは幼児期であるということは、寿命が後伸びしても変わらない。

そのために自らの興味関心を深めつつ、他の友だちと一緒に「遊ぶこと」。その環境を作ること、見極めることが、次世代を育てる家庭の力として必須と言えよう。

アメリカの作家・哲学者のロバート・フルガムは『人生に必要な知恵は全て幼稚園の砂場で学んだ』というエッセイの中でこう記している。

人間、どう生きるか、どのようにふるまい、

どんな気持ちで日々を送ればいいのか、

本当に知っていなくてはならないことを、

わたしは全部残らず幼稚園で教わった。

人生の知恵は大学院という山のてっぺんにあるのではなく、

日曜学校の砂場に埋まっていたのである。

わたしはそこで何を学んだろうか。

何でもみんなで分け合うこと。

ずるをしないこと。人をぶたないこと。

使ったものはかならずもとのところに戻すこと。

ちらかしたら自分で後片付けをすること。

人のものに手を出さないこと。

誰かを傷つけたら、ごめんなさい、と言うこと。

食事の前には手を洗うこと。

トイレに行ったらちゃんと水を流すこと。

焼きたてのクッキーと冷たいミルクは体にいい。

釣り合いの取れた生活をする事・・・毎日、少し勉強し、少し考え、

少し絵を描き、歌い、踊り、遊び、そして少し働くこと。

毎日かならず昼寝をすること。

おもてに出るときは車に気をつけ、手をつないで、はなればなれにならないようにすること。

不思議だな、と思う気持ちを大切にすること。

幼稚園の砂場と言う、ある意味で何も無いことの象徴のような場所にこそ、人生に必要な知恵が沢山埋まっているのである。そこに友だちと楽しく遊べるように環境設定すること。

今まで、家庭内で一人だったときは「自分だけのおもちゃ」であり、自分がいつ、どこで、どのように遊んでも、誰も文句を言う人はいなかった。しかし幼稚園等の「社会」に入ると、そのおもちゃは「みんなのおもちゃ」となる。

いつ、どこで、どのように遊んでもというわけにはいかなくなる。砂場遊びであるならば、スコップを使うのに順番を待たなければならない。

即ち不自由になるのである。しかしこの不自由が人間を成長させるのである。順番を待つという経験が規律と忍耐力を学ぶ。時には、「先に使っていいよ」という優しさに触れる。譲ったり譲られたりという経験を日々重ねていく。ここに人間的成長がある。

砂場で遊んでいる内に喧嘩になってしまうこともある。否定的に言っているのではない。むしろ喧嘩は貴重な人生体験である。楽しそうなおもちゃだから、そのおもちゃを独り占めしたら、どうになってしまうのか。順番を待てずに抜かしたら、どうになってしまうのか。無理やりおもちゃを奪い取ったら、どうになってしまうのか。それに対して「なにをやるんだ」と、思わず手が出てしまったら、どうになってしまうのか。

しかしこれら否定的な出来事を通して、人間は多くのことを学ぶのである。倫理観を学び、ルール違反をすると友だちが去っていくなど制裁や悲しみがあることを学び、それを通して自制心を学ぶ。譲り合う親切心を学ぶ。喧嘩をしても、赦したり、赦されたりするという極めて貴重な経験をする。この赦したり赦されたりという経験こそ、友情を学ぶ上で欠かせない経験であり、友情を学んだ時に、人生って楽しい、友だちと生きるって素晴らしいという、生きる意欲が養われるのである。

幼児期の遊びの中には、掛け替えのない人生の学びが詰まっていると言えよう。

それが教会であるならば、それらに加えて神への信仰の入り口を見出すことにもつな

がる。

誰かが病気になったら、心配してお祈りすることがあるだろう。神様の優しさを信じて、安心して生きることを学ぶこともあるだろう。たくさん遊ぶことを通して、人生の大切な知恵を学ぶのがこの時期である。

そしてこのように、遊びを通して生き方の基盤を、シッカリと築いた子どもたちは、学力においても、あと伸びすると言われる。

聖書において子どもの遊びについて直接的記述はない。しかし、聖書には、子どもたちが神の国に入るために必要な資質についての記述がある。たとえば、イエス・キリストは、「子どもたちがわたしに来るのを妨げないでほしい。神の国は、このような者たちのものである」とある。(マルコ 10:14)。

また、聖書には、子どもたちが神の国に入るために必要な資質として、謙遜や信仰、そして純粋さが挙げられている。これらの資質は、子どもたちが持つ自然な素質であり、遊びを通じて育まれるものでもある。

以上を踏まえると、遊びは、子どもたちが謙遜や信仰、そして純粋さを育むことができるきっかけとなりうる。

しかし、家庭での子育てには課題もある。例えば、現代社会においては、両親が共働きであることが多く、子どもたちとの時間を確保することが難しいという問題がある。

また、家庭内での暴力や虐待といった問題もある。これらの問題に対しては、家庭での子育てに対する解決策を模索する必要がある。これらについては、現代の欠かせない一大テーマであるが、本稿では手に余るので別の論考に譲りたい。

それらを踏まえた上で、キリスト教は、家庭での子育てにおいて重要な役割を果たすと言えよう。家庭が子どもたちに与える影響や、家庭での子育てが社会に与える影響を考慮しながら、家庭での子育てに対する課題に対しても取り組んでいくことが大切である。

次世代を育てる家庭の力として、筆者が考えるのは、家庭そのものが聖書に根差した価値観を重んじると共に、その次の成長ステップを見据えて、如何なる場所で人生の土台形成期を過ごしていくか、環境設定に相応し場所を見極め、そこで精一杯遊ばせるという事である。